創刊特別寄稿

新生人間科学部心理学科に向けて
―進化を続ける心理学コース―

金子玲子

現職：専修大学学生相談室　専任カウンセラー
1977年　文学部人文学科入学，1981年　同卒業
出身ゼミ：森武夫先生

新しい人間科学部心理学科のスタート，おめでとうございます。

私は卒業後数年してから学生相談室に非常勤カウンセラーとして入りましたので，学内で継続的に「心理」の発展を感じてきていますが，５月のホームカミングデイでは改めて立派になった心理スペースと多彩な教授陣を目の当たりにして，一気に学生時代の「心理」に戻って思いをめぐらせていました。

当時「心理」のスペースは，４号館４階のほんの一角でした。それでも学生の身には狭いと思ったことはなく，オープンな研究室があり助手の伊藤さんがいらしていつでも対応して下さっていることに，他の学部とは違うなと思っていました。研究室に行けば，誰かしら先生がいらして話ができたし，ゼミ生であるなしに関わらず，それぞれの先生が学生全体を知ってくれているという感じがしていました。金城先生が囲碁を打つ姿をよく目にし，山上先生にはマイコンクラブ（というものがあったのです）の活動を通してよく遊んでもらいました。自分では勉強しているつもりでしたが，今から思えばあれはいろんなことを知ってる兄貴に遊んでもらっている，ようなものでした。大学の先生って高校に比べて忙しくないみたい，と思っていました。本当は忙しいのにそう見せない格好良さがあったとは，当時は気づくべくもありません。そして，心理での一番の思い出は，東條先生に出会ったことです。

私は第一志望の大学に入れなかった所謂不本意入学の学生で，４月のガイダンスの期間，鬱々とした気分で過ごしていました。クラス指導の時間，担任が東條先生。学生の自己紹介で，変わった趣味を紹介した学生には熱心に質問し，ユニバーシアードに出場するといったアスリート学生にエールを送りと，実に熱心に聴いているのです。私はその姿の方に目を奪われました。そしてある学生が自分は不本意入学でと自らを卑下した話をした時，私は自分のことのようでドキッとしましたが，東條先生はそんなことは関係ない，これからが大事なんだと本気になって，ムキになってと言っていいくらい強い口調でその学生に話すのです。私にとって，その印象は強烈でした。

その頃は，まず人文学科に入学し，２年生から希望に沿って専攻が分かれるシステムで，心理学を専攻する学生が集まったところに東條先生がいらして，「あー，心理の先生だったのだ」と分かりました。その後講義を受け，折にふれての関わりから，いつも本気で学生に対する東條先生の姿に接している間に，専修大学に来ていなければこの先生と出会えなかった，ここに来て本当によかったのだと自然に思うようになりました。心理学を専攻するようになり，のちに親友となる友達とも出会うのですが，そうした人との巡り合いがあって，不本意感などはどうでもよくなっていきました。

東條先生は，専大は心理学の基礎がしっかり学べるのが特徴だとよく話されていました。今になればその意味がとてもよくわかります。「心理学統計」では，「理屈は難しすぎるので分からなくていい，使

い方だけ覚えなさい」と教わりました。基礎に加えて「生理学的心理学」では当時の最先端の知見が紹介されていたことも，臨床の仕事をするようになって初めて分かりました。

私たちの頃はパソコンも統計ソフトもありませんでしたから，関数電卓をたたいて統計処理の手順が踏めて，グラフや表が綺麗にかけていれば点がもらえたように思います（それだけではないと思いますが)。あの頃苦労していたことが，今はたちどころに仕上がってしまうのは，凄いとしか言いようがありません。それだけに当然レベルは上がり，要求されるものも難しくなっていることでしょう。

今から思えば，私が学生だった頃の専大心理はまだ創成期でした。その後心理学コースから心理学科となり，大学院ができ，４号館４階が心理学フロアとなり，先生方も増えてと進化し続けてきた専修大学の「心理」。そして2010年，新生人間科学部心理学科はハードもソフトも全国に誇れる内容です。これからの若い皆さんには，より広く，より深く学んでいって欲しいと思います。専修大学の心理学科で学べることは，大きな特権を得たといっても過言ではないでしょう。卒業生としても誇らしい思いです。

心理学科の更なる発展を祈ります。